

課題遂行時の心的構え

川 島 大 司

はじめに

筆者はこれまで叩打法による個人差・個人内変動の研究(川島・久米, 1997)、(川島・久米, 1999)、(川島・久米, 2000)、(川島・久米, 2001)、自己評定値と作業検査結果との関連の研究(川島・岡村・久米, 2004)などを行ってきた。

叩打法による個人内変動の研究では、個人内変動の大きい人、少ない人が存在し、その違いは性格によるものではないかとの推測をたてたが、そのような要因によるものではなく、中枢の働きによるものではないかとの結論に達した。

性能を表す用語(慎重、緻密、几帳面、誠実、など)は数多くみられるが、これまでの性格検査ではほとんど取り上げられていない。作業遂行時の重要な要因とみなされる綿密性、慎重性、指示遵守性を取り上げ、それらの尺度の自己評定尺度では過小、過大評価する傾向が認められるが、作業検査ではそのような傾向が認められないことが判明した。

そこで、今回は、タイピングによる注意の持続度と作業検査(CEL-S)結果の見落とし率を取り上げ、ワープロ操作の習熟度との関連を検討した。

I. 注意の持続度とワープロ操作の習熟度(可否)との関連

1. 目的

ワープロ練習検査の注意の持続度とワープロ操作の習熟度(可否)との関連を検討した(川島・久米2003)。

2. 方法

(1) 被験者

女子大学生138名

(2) 材料

ワープロ練習検査、EP-S検査、ワープロ検定試験(検定協会が主催)

(3) 手続き

(i) コンピュータを使って、ワープロ練習検査を実施した。

英文の無意味綴りの文章をワープロで打ってもらった。文の最初の文字は大文字にし、その他は小文字で打ってほしい。／のところは1スペースあけてくださいなどの規則を説明し、3分間練習をしてもらった。計測をするための説明で、練習の時の説明に加え、休憩したいときは一時中断し、休憩終了後再開して入力続けられる事を追加する。練習が1回終了したら、同じ文章を時間まで何回も打つ。60分間練習をしてもらった。

(ii) EP-S検査の勤勉・こつこつ型尺度(こつこつ型:0, 全然その通りでない~4, 全くその通り、の5段階)に自己評定してもらった。

(iii) 検定協会が主催するワープロ検定を受検してもらった。ワープロ検定の練習は、強制的に練習させるのではなく、各自で自由に練習してもらった。

3. 結果と考察

ワープロ練習検査の整理は次の通り行った。

① 試行数・所要時間の計算: 最後まで入力が終了している場合を1試行とした。最後まで入力が終了している試行数を数え、最終試行の入力が完成していない場合は、その前までの試行数とした。各試行の所要時間は小数第2位を切捨てて第1位表示とした。最終試行の入力が完成していない場合

は、その前の試行までの所要時間とした。

- ② 判定・評価：各試行の所要時間を合計して総所要時間を算出し、課題遂行に割当てられた時間（60分）で割って、所要時間率を算出した。試行数×所要時間率で総試行・所要時間率（注意の持続度）を算出した。総試行・所要時間率による注意の持続度を5段階評価に換算し、各被験者の得点とした。

図1は検定合格者と不合格者について、注意の持続度得点の各評価の比率を求め、その累積比率を表したものである。検定不合格者は注意の持続度得点が2で全体の80%を占めているのに対して、検定合格者は50%ほどである。このことより検定合格者のほうが注意の持続度得点が高いことがわかる。

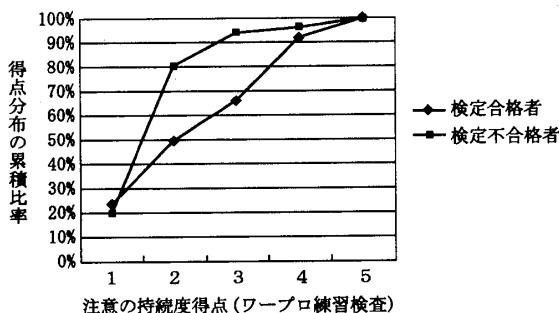


図1. ワプロ合否と注意の持続度得点（ワプロ練習）の累積比率

注意の持続度得点1, 2をL群、注意の持続度得点3, 4, 5をH群として検定合格者、不合格者による2×2のクロス集計の独立性の検定をおこなった結果、 $\chi^2=11.729$ ($P<.01$) という値がでた。このことよりも検定合格者のほうが注意の持続度得点の高いほうに多いことがわかる。

次に、注意の持続度の検査とワプロ操作の習熟度（合否）の相関を点二系列相関で算出、検定をおこなった結果、 $r=.225$ という値 ($P<.005$) が出、両者には関連があることが判明した。

図2は検定合格者と不合格者について、EP-S検査の勤勉・こつこつ型得点の分布の比率を求め、その累積比率を表したものである。

わずかではあるが、検定合格者のほうが勤

勉・こつこつ型得点が高いことがわかる。

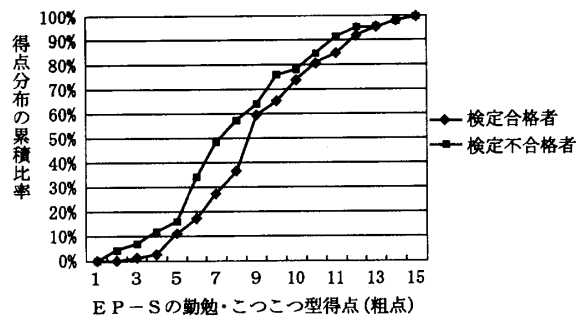


図2. ワプロの合否とEP-Sの勤勉・こつこつ型得点の累積比率

前と同様に、勤勉・こつこつ型得点とワプロ操作の習熟度（合否）の相関を点二系列相関で算出、検定をおこなった結果、 $r=.158$ という値 ($P<.05$) が出、両者には関連があることが判明した。

II. 作業検査結果 (CEL-S) とワプロ操作の習熟度 (合否) との関連

1. 目的

CEL-Sの見落とし率とワプロ操作の習熟度（合否）との関連を検討した（川島・久米2004）。

2. 方法

(1) 被験者

女子大学生143名

(2) 材料

作業検査 (CEL-S)、ワプロ検定試験 (検定協会が主催)

(3) 手続き

CEL-S検査は、43行の普通の英文で、それぞれの行の中にある「e」の数を行毎に数えて右端に記入してもらった。数える時間は4分間とした。

検定協会が主催するワプロ検定を受検してもらった。ワプロ検定の練習は、強制的に練習させるのではなく、各自で自由に練習してもらった。

3. 結果と考察

CEL-S検査の整理法は次のような指標について行った。

- ① 試行数: 作業が完了した最後の行までの行数とした。
- ② 累積正答数: 作業が完了した行までの累積正答数を算出した。
- ③ 各行の見落とし数: 各行の見落とし数を算出した。(例: ある行の正答数が4の場合、解答が5または3の場合でも、見落とし数は1とした)
- ④ 総見落とし数: 作業が完了した行までの累積見落とし数を算出した。
- ⑤ 見落とし率: 総見落とし数を累積正答数で割り、パーセントで表示した。

図3は検定合格者と不合格者について、CEL-Sの見落とし率の2%毎の比率を求め、その累積比率を表したものである。検定合格者は見落とし率が8%で全体の80%を占めているのに対して、検定不合格者は65%ほどである。このことより検定合格者のほうが、見落とし率が少ないことがわかる。

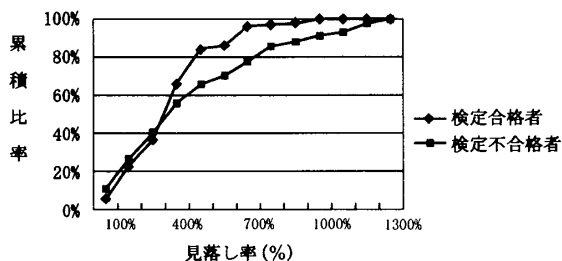


図3. ワープロ合否とCEL-Sの見落とし率(%)の累積比率

次に、CEL-Sの見落とし率とワープロ操作の習熟度(合否)の相関を点二系列相関で算出、検定をおこなった結果、 $r = -0.150$ という値($P < 0.05$)が出、両者には負関連があることが判明した。

図4は検定合格者と不合格者について、EP-S検査の慎重・綿密型得点の分布の比率を求め、その累積比率を表したものである。

わずかではあるが、検定合格者のほうが慎重・綿密型得点が高いことがわかる。

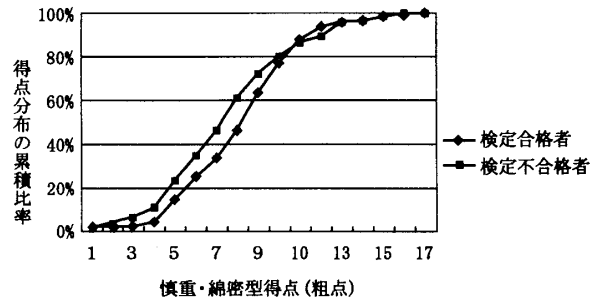


図4. ワープロ合否とEP-Sの慎重・綿密型得点の累積比率

前と同様に、慎重・綿密型得点とワープロ操作の習熟度(合否)の相関を点二系列相関で算出、検定をおこなった結果、 $r = 0.104$ という値($P < 0.025$)が出、両者には関連があることが判明した。

表1はCEL-Sの試行数と見落とし率による、CEL-Sの評価表である。試行数が多く、見落とし率が少ないほど知的効率が良くと評価される。

表1. CEL-S評価表

| | | | | | | |
|-------------------------|-----------|---|-------|-------|-------|-------|
| 見 通 し 率 (%) | 14.1~ | E | 低迷・粗雑 | | 迅速・粗雑 | |
| | 10.2~14.0 | D | | | | |
| | 4.7~10.1 | C | | | | |
| | 0.8~4.6 | B | | | | |
| | 0.0~0.7 | A | 低迷・緻密 | | 迅速・緻密 | |
| 試行数の5段階評価 | | | E | D | C | B |
| 試 行 区 分 | | | 0~16 | 17~20 | 21~23 | 24~27 |
| | | | 試 行 | | | |

III. 全体的考察

注意の持続度とワープロ操作の習熟度との関連では、検定合格者と不合格者について、注意の持続度得点を比べたところ、検定合格者のほうが注意の持続度得点が高いことがわかった。

注意の持続度の検査とワープロ操作の習熟度(合否)には関連があることが判明した。

検定合格者と不合格者について、EP-S検査の勤勉・こつこつ型得点を比べたところ、わずかではあるが、検定合格者のほうが注意の持続度得点が高いことがわかった。

勤勉・こつこつ型得点とワープロ操作の習熟度(合否)には関連があることが判明した。

作業検査結果 (CEL-S) とワープロ操作の習熟度との関連では、検定合格者と不合格者について、CEL-S の見落とし率を比べたところ、検定合格者のほうが見落とし率が少ないことがわかった。

CEL-S の見落とし率とワープロ操作の習熟度 (可否) には関連があることが判明した。

検定合格者と不合格者について、EP-S 検査の慎重・綿密型得点を比べたところ、わずかではあるが、検定合格者のほうが慎重・綿密型得点が高いことがわかった。

慎重・綿密型得点とワープロ操作の習熟度 (可否) には関連があることが判明した。

これらの結果から、課題遂行時には注意の持続性、慎重・綿密さが非常に重要であることが判明した。

今後は、ワープロ操作の習熟度 (可否) のグレードを上げた場合のそれぞれの検査結果との関連を調べていきたい。

性格 (3)

— 慎重・綿密性の自己評定値と作業成績との関連
その 2 —, 日本応用心理学会第 71 回論文集

参考文献

1. 川島大司・久米稔 1997 サンプル数の諸問題 (8)
— 叩打法による個人内変動の検討一, 日本応用心理学会第 64 回論文集
2. 川島大司・久米稔 1999 サンプル数の諸問題 (9)
— 叩打法による個人内変動の検討その 2 —, 日本応用心理学会第 66 回論文集
3. 川島大司・久米稔 2000 サンプル数の諸問題 (10)
— 叩打法による個人内変動の検討その 3 —, 日本応用心理学会第 67 回論文集
4. 川島大司・久米稔 2001 サンプル数の諸問題 (11)
— 叩打法による個人内変動の検討その 4 —, 日本応用心理学会第 68 回論文集
5. 川島大司・久米稔 2003 作業態度の研究 (1)
— 注意の持続度とワープロ操作の習熟度 —, 日本教育心理学会第 45 回論文集
6. 川島大司・久米稔 2004 作業態度の研究 (2)
— CEL-S の見落とし率とワープロ操作の習熟度 —, 日本教育心理学会第 46 回論文集
7. 川島大司・岡村美奈・久米稔 2004 性能的